

第1回 多治見市教育基本計画策定市民委員会 議事要旨

日 時 令和4年7月11日（月）午後3時～午後5時

場 所 多治見市役所駅北庁舎4階大ホール

参加者 最終頁名簿のとおり

内 容

1 教育長挨拶

2 委員自己紹介

3 委員長・副委員長の選任

- ・ 事務局推薦で、委員長に石井拓児氏、副委員長に春日晃章氏を選任。

4 議題

(1) 事務局説明資料①について

- ・ 意見・質問なし

(2) 多治見市の現状について

- ・ 2ページ「児童生徒の学力」のグラフについて、小学校の算数の点数が令和元年度から高くなっているのはどうしてか。

→問題の形式が変わったことが要因として考えられる。

- ・ 学力は問題の難易度の影響を受けているが、体力はコロナ禍であることも影響し低下していると感じる。

- ・ 5ページ「運動やスポーツの取り組む時間」のグラフについて、スポーツの取り組む時間が全国平均や県平均に比べて多治見市は短い。この結果が、個人差によるものか、全体的に短くなっているかによってアプローチは変わってくる。また、クラブ制に要因はあるのか。

→クラブ制の影響ではなく、全体的にスポーツの取り組む時間が短いと考えている。

- ・ スポーツに取り組む時間は、暑さによる熱中症予防等、多治見市の環境も影響していると感じる。
- ・ 「運動やスポーツの取り組む時間」のグラフの集計対象者（中学校2年生）以外の児童生徒についての状況はどのようなものであるか。また、男子より女子が短いという男女格差は課題である。

→小学生は、中学生に比べて取り組む時間がやや多い。

- ・ 2ページ「児童生徒の学力」について、小学校の国語の点数が低くなっている原因は

何か。

→分析すると、漢字の読み書き、言葉の関係といった言語に関する設問に弱い傾向がある。家庭学習で漢字ドリルを何回もやることが力の定着になっているか等を各学校見直し、取り組むよう話している。

- ・ 小学校の国語力の低下と外国籍児童生徒の増加には関連があるか。

→外国籍児童生徒の結果を集計にいれるかどうかは各学校で判断しているため、関連しているかは不明である。

- ・ 愛知県は、全国で一番外国籍児童生徒数が多いため、国語の成績が悪い。
- ・ 学習意識調査では、嫌いな教科で国語が上位にあがっているが、嫌いと学力の関連性についての分析はあるか。

→嫌いな理由についての調査はしていないが、国語は、答えが一つではないところが他の教科と異なり分かりにくいといわれている。国語は、物語を読んで語りあう、説明文を読んで学んだことを確かめあうといった今求められている仲間と話しあって学びにつなげる教科の1つである。この対話的な学びを楽しく思える授業改善が必要であると感じる。

- ・ 国語力は様々な教科の基礎となるため、国語力を引き上げることは重要である。

- ・ 教職員の超過勤務時間について、教員の業務量が変わらなければ超過勤務時間が減少しても持ち帰りの業務が増えると思われるが、業務量は多少軽減されているのか。

→超過勤務時間は減少しているが、持ち帰りの業務で対応していることも否定できない。

→現場の努力として、勤務終了時刻である 16 時 45 分以降には会議を設定しないようにしている。会議の回数の見直し等努力は行っているが、持ち帰りの仕事があるのは承知している。勤務終了時刻までに業務が終了するよう教育課程を組む必要があると考えているが現実的には難しい。

- ・ 岐阜県も含め、全国的に教員希望者が減っている。良い人材を教育現場に獲得するために校長先生を中心として行政と一緒に業務の精査を実施し整理、廃止できるものはして欲しい。

- ・ 教職員の働き方改革について、学校の努力以外にどのようなサポートがあると学校は助かるか。

→国レベルのことになるが人的なサポートである。国の政策で1クラス35人学級に順番になり、学級の人数が減ると教員の業務も減る。また、特別な支援が必要な児童生徒に対応する支援員の有無も教員の業務に影響する。多治見市は支援員を手厚く配置しているが、国費や県費で配置してもらえるとよい。

- ・ 「先生の教え方で、どんなときうれしくなりますか。」(多治見市学習意識調査から)

の質問で、「考え方ややり方を丁寧に教えてもらおうとき」が一番多い。過去との比較はあるか。

→H23、28年度で同様の調査を実施しており、両年度とも一番多い回答となっており、調査を行うごと回答する割合が増えている。

- ・ 学習方法、考え方を褒めてもらいたいという子どもが増えて欲しい。受け身的な学習でなく、自主的な学習に喜びを感じる子どもが増えるような計画になるとよい。
- ・ P T Aの役員の立場からみても教員は多忙であると感じる。働き方改革を進めるうえで子どもたちと接する時間が減少していないか。P T Aの会議で教員の時間をさいてもらうことに躊躇する。教員の働き方改革を進めるうえで何が必要なのか考えることは必要である。
→働き方改革として、超過勤務時間の短縮のみを推し進めているのではなく、余裕をもって子ども達と関わること、生き生きと元気に子ども達の前に立つことが重要である。また、保護者や地域とのつながりで学校は支えられていると考える。今後も各校長と共通理解をもち進めていく。
- ・ 不登校が増えていると感じる。教育委員会としてはどのようにとらえているか。
→不登校については、重要な課題であると考え。現在、新たな不登校を防ぐことを目標に取り組んでいる。不登校の要因は様々な要素があり、毎年実施する各学校の分析によると、小中学校ともに多いのは無気力・無関心、次に小学校では3年続けて、親子の関わり方、中学校では2年続けて、友人関係、親子の関わり方が上位にあがっている。この結果を踏まえて対応していくことが必要である。
- ・ 自己肯定感は年齢が高くなると下がっていく。自己肯定感には成功体験や達成感を感じる必要がある。学校行事や地域の行事に参加して、達成感を味わう、褒めてもらうことで自信をもち、自発的に行動できるような良い循環となる。
- ・ 自己肯定感には2種類があり、一つは達成感で育まれる。もう一つはその子のありのままが認められることである。高校、大学と自己肯定感をさらに上げるには、出来る、出来ないではなく、ありのままの自分が認められるという認識をいかに養うかが課題となる。

(3) 説明資料②

- ・ 「令和の日本型学校教育」は、幼児教育がめざしているものである。幼児教育は身近な環境に主体的に関わるなかで、自分の良さに気付き、学習に向かう土台作りをしている。また、失敗しても挑戦することを大切にしている。これからの時代、主体的に社会の変化に向き合って、他者と協働していくことは重要であるため、「主体的に」

という言葉が「めざす子ども像」に含まれているのは良い。

- 素敵な「めざす子ども像」である。自己肯定感を育むには2つポイントがある。ありのままの自分で良いという自己有用感と成功体験である。成功体験を得るためには、失敗しても挑戦することが重要であり、挑戦するためには、自己有用感と失敗しても大丈夫という居場所づくりが必要である。受け身的な学びより主体的な学びの方が成功体験を得ることができ、勉強のおもしろさを感じることができる。この「めざす子ども像」は、自己有用感から挑戦等の循環が考えられており、図にもよく表れている。これからの時代、自分で課題を見つけて解決する能力が重要になるため、子ども達に失敗しても挑戦する力を身に付けてほしい。「めざす子ども像」に失敗しても大丈夫というのがあるとさらによい。
- 人工知能は、過去の様々な例から最適な答えを出すことは得意だが、新しいことを生み出す力はないため、この力を子どもたちに育てて欲しい。
- 「挑戦」という言葉が入ったのは良い。挑戦のなかに、失敗しても諦めずに挑戦し続けるという概念も含むとよい。失敗したら諦めてしまう子どもが多いと感じる。
- 幼稚園・保育園と小学校は、子どもへの手のかけ方が違う。幼保小の連携、例えば小学校生活（集団生活）はどのように送るのかを幼保の先生が理解することは必要である。幼児教育は非常に重要であり、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿(10の姿)」のなかの「自立心」は特に大事である。自分でやっていけるという基礎は幼児期で育つため、幼保小の連携をスムーズに行わないと小1プロブレムとなる。また、幼児の主体性を養うには、幼保の先生の主体性が必要であり、幼児に様々な体験を行わせ、好きなものを選ばせることが大切である。良い意味で見守る、手をかけすぎないことが自立力を養うことにつながる。
- 幼保の先生や教員が主体的に研修に取り組めるような環境があるとよい。
- 自己実現は、自分の中で完結するのではなく、社会とのつながりで行う必要がある。今回の「めざす子ども像」にも、周囲とつながりながら自己実現を果たすという社会性の視点も必要ではないか。社会性という言葉も前回の計画と同様加えた方がよいと考える。
- 主体的とは、物事を自分の事として考えることである。学校では授業改善に向けての研修で、主体的に追及する生徒とはどのような生徒か等を職員間で話し合う。この主体的の本質的な部分を多治見市の教員が教育基本計画と共に共通理解できるとよい。
- 「令和の日本型教育」にも多様なという言葉があり、「多様性」という言葉は今の時代のキーワードであると感じる。「共生」という言葉に代行されているともいえるが、どこかに「多様性」という言葉が入るとよい。多様な他者の良さ見つけることができれば自他を尊重することに結び付く。
- 地域の祭りを中学生中心に行っている。中学生に100万円の予算内での企画を立案してもらおうと最初は萎縮するが、委ねて任せていると役割を自分たちで考えるようにな

る。この生徒の中には、不登校である子や消極的な子もいたが、達成したという体験をすることで自己肯定感がうまれた。地域で子供たちに何か経験させる機会があるとよい。「めざす子ども像」の図にあるように、地域が子どもたちを応援するとよい。

- ・ 地域が支えることで、子どもたちが達成感を味わい自分の良さを発見できることがある。
- ・ 幼児も受け身な子どもや諦めやすい子どもが多くなっている。この「めざす子ども像」の図のように、自分が必要であり、失敗してもよいということが認められるというのは挑戦するには必要である。保育園では、放任ではない、自立を求める保育が保育士に求められている。しかし、保育園の力が弱くなっており、先生ではなく託児者と認識されつつあり、保育士の伝える力、保護者への啓発が必要であると感じる。
- ・ 多治見市のデータを分析した結果、学力が高い子、体力が高い子、学力・体力の両方が高い子の生活環境で唯一共通していた要因は、親の相談できる相手が複数いることであった。親の子育てを孤立させないことが大切で、インターネット等により様々な情報を得ることができるが、正しい情報を見極める必要がある。子育てに関する相談窓口を設ける施策が必要である。
- ・ 不登校の児童生徒が増えていることを心配している。保健室・相談室に行く子は増えてはいるが、適応指導教室にも行けない子もいる。フリースクールまでは行かなくても子どもの居場所が公共でつくれないか。不登校についての皆さんの意見が聞きたい。
- ・ 最近、成立した「こども基本法」を念頭におく必要がある。法律に規定のある子どもの権利は、多様性を尊重し、ありのままの自分を認めることである。また、子どもの意見表明の規定もあり、子どもの意見に耳を傾けることも意識しておくといよい。
- ・ 「めざす子ども像」を学習評価とすることや全員の目標とすることは避けた方がよい。主体性はもちろん必要であるが、自分では何をやってよいかわからない子には放任ではなく、寄り添うことも必要である。

5 その他

- ・ 第2回委員会：9月5日（月） 14時から16時 駅北庁舎 4階第ホール
- ・ 第3回委員会は後日調整

多治見市教育基本計画策定市民委員会 委員等名簿（敬称略）

委員

名前	所属・役職	その他
石井 拓児	名古屋大学教育学部教授	委員長
春日 晃章	岐阜大学教育学部教授	副委員長
大嶽 和好	教育委員	
岡田 海保	陶都中学校 校長	
加知 玲子	養正小学校附属幼稚園 園長	
加藤 智章	教育委員	
木下 貴子	教育委員	
鈴木 亜紀子	公募	
中澤 香代	教育委員	
西尾 伸一郎	脇之島小学校 校長	
藤浪 貴大	子ども支援課 課長代理	
森井 直美	多治見市PTA副会長	
山田 美穂	公募	